

弥生時代における鉄器保有の一様相

－九州・中国地方の集落遺跡を中心として－

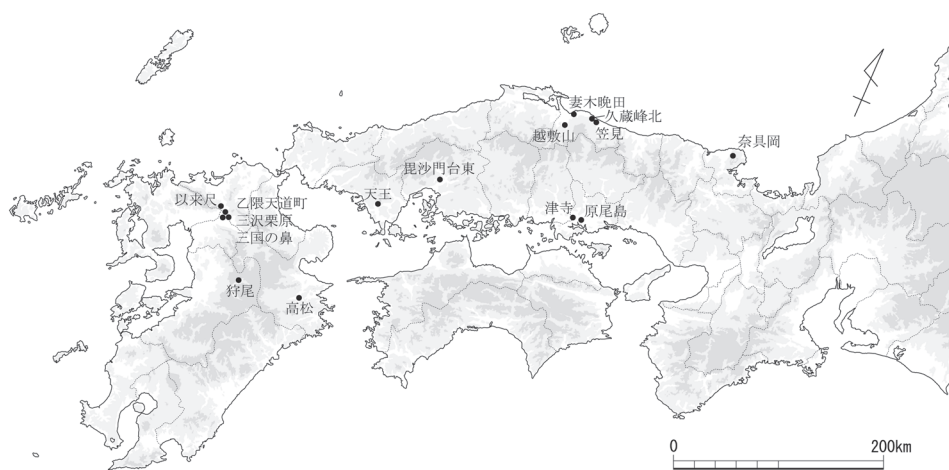
野島 永

はじめに

弥生時代、日本列島に鉄器文化が波及するが、鉄器使用の開始期は前期末葉、あるいは中期初頭に降る可能性が高くなった。^(注1) 戦国時代の鑄造農具が舶載され、その破片の再利用が始まる。その直後に列島独自の鍛造鉄器が出現してくる。九州北部において中期中葉頃に普及し始めた鍛造技術は中期後葉には急速に拡散し、後期には鉄器製作技術は西日本一帯、終末期までには北陸や関東にまで浸透していった。弥生時代後期は拙いながらも鍛造鉄器が製作され、それが各地に浸透、定着していった時期であったといえる。

しかし、鉄製武器や農工具などの各種鍛造鉄器が導入された社会的背景は地域によってやや異なっていたものと考えている。鉄器普及の社会的背景に迫るためには、まずは住居跡や墓壙などから出土する鉄器数や器種組成に関わる基礎的情報を収集し、その地域的差異を明らかにせねばならない。^(注2) 弥生時代後期の西日本においては、鉄素材の入手とその成品化、分配が社会の複雑化と階層化に重要な役割を果たしていったものとみられるが、考古学的証拠からその実態を具体的に推察していきたい。

鉄器普及の社会的背景を推察するためには、地域社会が鉄素材や鉄器をどのように入手したのかを想定することが重要であろう。市場を介したとするためには、^{いちば}市場として利用されたマーケット・プレイス（遺構）の考古学的検証を直接的に行なえばよいわけであるが、恒常的な施設が構築されていない限り、遺構としての確認は事実上困難であろう。しかし、社会的に優劣のある住居跡からそれぞれ出土する特定遺物の数量や器種組成比率の比較によって、その遺物が市場を流通した財であったのかどうかを間接的に推測することはできる。^(注3) 例えば、社会的格差があるとみられる2種類の住居跡から出土する特定の遺物の出土量や組成比率に格差が認められないのであれば、この遺物は市場を介して入手されたか、あるいは日常的に消費されていた財と認識することができる。しかし、その出土量や比率に格差が認められるならば、一般的にはより上位の社会階層を中心に占有された貴重財であったものと推測することができる。また、遺物の出土状況や分布状況からも日常的消費財であったのか、いわゆる貴重財とすることができるのか、流通財としての性格を想定することが可能となる。このような分析は、生産を司る階層上位者から分配されたも



第1図 言及遺跡位置図

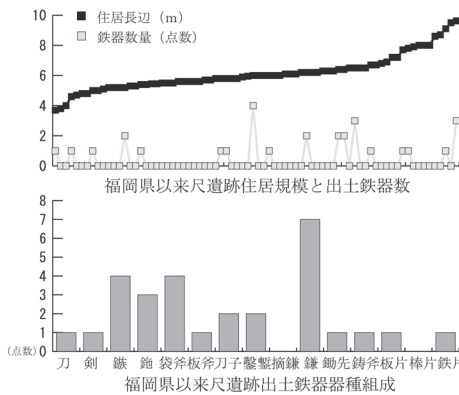
のなのか、市場を介して流通したものなのか、あるいは親族関係を基軸とした互酬的交換によって獲得されたものなのか、などといった流通の様相を想定するための判断材料ともなろう。各地域において首長層あるいは集落内の有力者、または一般構成員がどのようにしてその財を入手、利用していたのかを推察することができるのである。さらには、地域的首長の政治・経済的特権の伸長がどのようになされていったのかを想定することさえできるようになるかもしれない。このような試案に基づいた分析を経て、鉄器普及の背景やその流通の位相が各地で異なっていたことをあきらかにし、またそれが各地の首長層の経済的基盤形成の差異に起因するであろうことを想定しておきたい。^(注4)

1. 九州北部地域における鉄器保有の様相

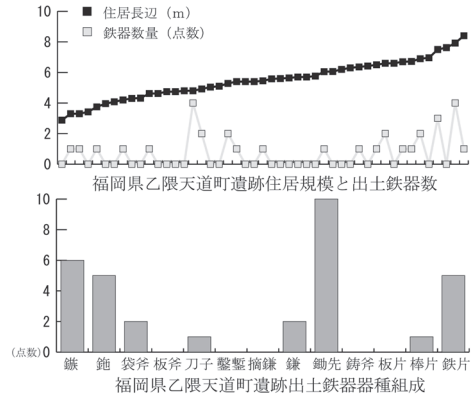
弥生時代後期前葉から中葉には、西日本各地において新たな集落が営まれ始め、鉄器の使用がみられるようになった。各地域の集落遺跡で調査された竪穴住居跡の規模格差からみた鉄器の出土傾向について概観していきたい。^(注5)

福岡市の周辺市も含めて大都市域の宅地開発や幹線道路の整備などによって大規模調査が引き続き、弥生時代の集落遺跡の調査成果も蓄積されることとなった。筑紫野市以来尺^(注6)遺跡、乙隈天道町^(注7)遺跡、小郡市三沢栗原^(注8)遺跡、三国の鼻^(注9)遺跡などでは、弥生時代後期を通して集落が営まれていた状況が判明している。

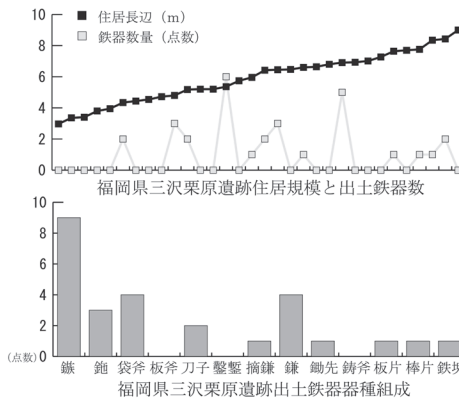
九州北部地域では、後期中葉頃に集落が急増し、平面形が長方形となる竪穴住居が普及する。通常は2本、大形になると4本の主柱をもち、ベッド状遺構を作りつける。竪穴住



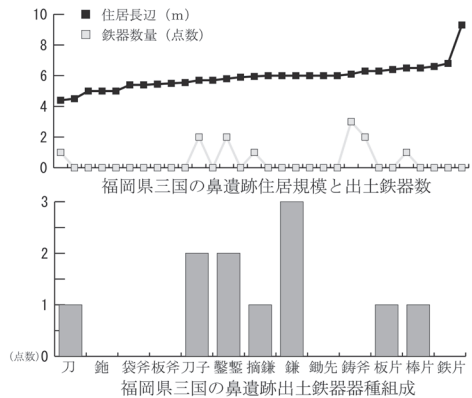
第2図 福岡県以来尺遺跡集計



第3図 福岡県乙隈天道町遺跡集計



第4図 福岡県三沢栗原遺跡集計



第5図 福岡県三国の鼻遺跡集計

居は比較的密集して建てられており、規格性が高い。中期前葉以降、鉄器がいち早く普及する先進地域ではあるが、後期後葉になっても石庖丁をはじめとした各種磨製石器も数多く出土し、鉄器とともに使用されていたようである。

さて、筑紫野市以来尺遺跡の住居跡別鉄器数および器種組成の集計をみてみよう^(注10)(第2図)。対象住居跡数76基、住居跡規模は長辺3.70mから9.62m、平均6.14mとなる。住居跡の規模を示すグラフは緩やかな逆S字状を呈しており、長辺4m前後の最小規模住居跡とともに長辺8m以上となる最大規模の住居跡もわずかながら存在していることがわかる。長辺6m前後の平均的住居のなかでは、このような大形住居は視覚的にも注目されやすい状況にあったものと想像することができる。他とは異なる特別な住居である可能性は高いといえよう。しかし、住居跡の規模によって鉄器出土数が左右されるわけではなさそうである。むしろ住居跡規模とは関係なく、鉄器・鉄片が出土するといった傾向があるようにみえる。出土した鉄器・鉄片の総数は29点、住居跡ごとの出土点数はそれぞれ1～2点程

度、多くても4点しかないものの、鉄器器種は多彩である^(注11)。以来尺遺跡では鉄鎌が7点と突出しているが、これらがとくに大形堅穴住居跡から出土するといった傾向もみられない。

小郡市乙隈天道町遺跡では、対象住居跡数47基、鉄器・鉄片出土総数は32点となる(第3図)。住居跡規模は長辺2.88mから8.40m、平均5.48mとなる。比較的規模の大きい住居跡の鉄器出土数が3～4点とはなるものの、最小規模の住居跡にも鉄器が普遍的に出土していることが窺える。鉄製工具とともに鉄刃農具(鋤先)が普及していたようである。見方にもよるが、これも住居跡規模に規制されているとは思えない。

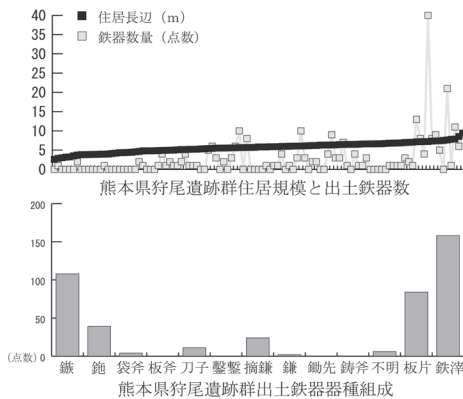
小郡市三沢栗原遺跡では、対象住居跡32基、住居跡の長辺規模は2.97から9.00m、平均5.92mと以来尺遺跡の住居跡規模とほとんど変わらない。鉄器・鉄片出土総数は30点(不明品3点含む)である(第4図)。やはり、住居跡規模と鉄器出土数との間に相関関係はみとめられない。

小郡市三国の鼻遺跡では、対象住居跡30基、住居跡の長辺規模4.40mから9.30m、平均5.90mとなる(第5図)。鉄器・鉄片出土総数12点(不明品1点含む)、鉄器出土数が少なく限られているにも関わらず、大形住居跡に鉄器が集中するようにはみえない。数量の割に鉄器器種は多彩であり、当集落でも鉄製工具とともに鉄刃農具(鎌)が普及していたものとみられる。

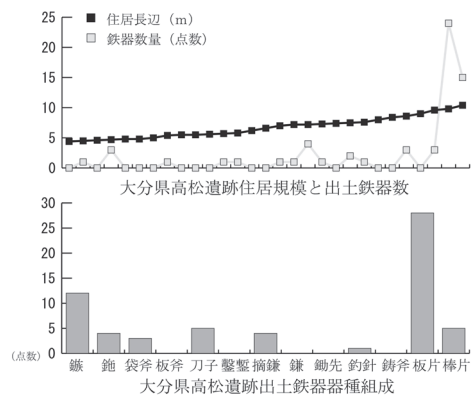
弥生時代後期には、九州北部地域の各集落において鉄刃農具をはじめとした各種鉄製農工具が保有される。しかし、大形住居跡からの鉄器数が群を抜くような状況にはない。また、大形鉄斧や鉄刃農具などが大形住居跡に集中するものでもなかったようである。九州北部地域の集落では、構成員の社会的地位によって鉄器の保有に著しい格差をみることはできないといえるだろう。村落内有力者によって各種鉄製農工具が入手され、それらが分配されたという推測を困難にする結果である。

2. 九州中部地域における鉄器保有の様相

九州中部では、熊本県の阿蘇山麓の弥生時代集落群と大分県大野川流域の集落群からの調査事例を選んだ。まず、熊本県阿蘇市狩尾遺跡群^(注12)についてみる(第6図)。対象住居跡107基、住居跡規模は長辺2.62mから9.42m、平均5.70mで、鉄器・鉄片出土総数278点となる。狩尾遺跡群でも住居跡平面形はすべて方形に変化している。九州北部同様にベッド状遺構をもち、通常は4本、小形のものは2本の主柱となる。鉄器・鉄片は住居跡1基平均で3.5点、長辺4.8m程度の住居跡から頻繁にみられるようになり、7.0m以上の住居跡規模になると、数点から数十点出土する傾向がある。大規模な住居跡ほど鉄鎌をはじめとして複数の鉄器を保有していたことがわかる。しかし、鉄器器種となると、九州北部でみら



第6図 熊本県狩尾遺跡群集計



第7図 大分県高松遺跡集計

れたような鉄鎌や鋤先などといった大形鉄刃農具の出土数は少なく、その多くが鉄鎌、次いで鉋や摘鎌といった小形鉄器が主体となる。また、阿蘇郡を中心とした阿蘇山麓周辺の弥生時代後期の大規模集落には、多量の鉄器・鉄片とともに鉄滓が頻繁にみられる。このため、当該地域では鉄器だけでなくその原料素材さえも生産していた可能性が指摘されている。^(注13)九州北部に素材を頼らずに地域内で成品を加工した可能性もありえよう。その際、地域首長層や各村落の大形住居に居住したと考える有力者(村落内階層上位者)が素材生産(入手)から鉄器製作、さらにはその分配にある程度関与していた可能性を想定することができる。村落内の階層上位者は下位者達に分配を行なうことによって自らの地位の保全を行なうために、^(注14)かなり小規模な住居にも鉄器がもたらされる仕組みが内包されていたとみてよからう。

次に大分県大野郡高松遺跡である。対象住居跡29基、住居跡規模は長辺4.40mから10.40m、平均6.69mとなる^(注15)(第7図)。鉄器・鉄片出土総数は62点で、大形住居跡に多量の板状鉄片や鉄鎌、鉄製工具が集中する。小規模住居跡でもわずかながら鉄器が出土しており、住居跡や出土鉄器の多寡を別とすれば、狩尾遺跡群と同様の鉄器保有の状況を示しているといえる。

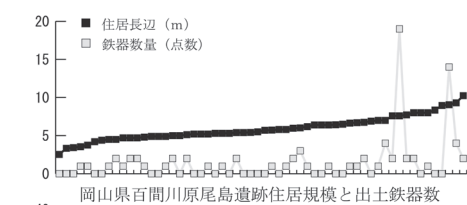
3. 山陽地域における鉄器保有の様相

山陽地域では、岡山市百間川遺跡群原尾島遺跡において住居跡調査例が蓄積されている^(注16)(第8図)。原尾島遺跡では住居跡57基を対象とした。住居跡平面形は円形と隅丸方形が混在している。後期を通して円形から徐々に隅丸方形へと変化していくようではあるが、大形住居跡の多くは円形である。住居跡規模は長辺・長径2.53mから10.24m、平均5.92mとなる。百間川後期Ⅱ期からⅢ期にかけて出土鉄器数が増加し、Ⅳ期では6割近くの住居跡

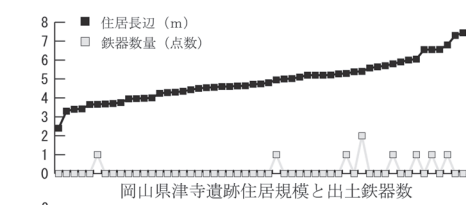
から鉄器が出土している。長辺・長径が7.0mを超える大形住居跡では、鉄器・鉄片が出土する場合が多く、その総数も84点とかなり多いことがわかる。先述した熊本県狩尾遺跡と同様の傾向であり、村落内階層上位者が鉄器流通にある程度関与していた可能性を考えることができる。ここでも階層構造の維持のために、かなり小規模な住居にも鉄器がもたらされていたものとみてよからう。ただし、鉄鍬や鉋が主要器種となり、鉄刃農具の出土はほとんどみられないことから、貧弱な器種組成といわざるをえない。

このほか、岡山市津寺遺跡でも同様の集計を行なった^(注17)。対象住居跡53基、住居跡規模は長辺・長径2.40mから7.44m、平均4.88mとなる。出土鉄器は9点とわずかではあるが、規模の大きい住居跡から鉄器出土がみられる傾向があり、大形住居跡に偏在する傾向は否めない(第9図)。

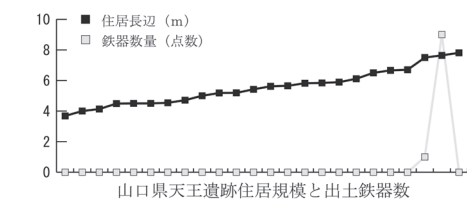
また、山陽地域西部でも調査住居跡数や鉄器出土数は少ないものの、弥生時代後期の集落遺跡が検出されている。なかでも鉄器出土例が比較的多かった山口県周南市天王遺跡^(注18)



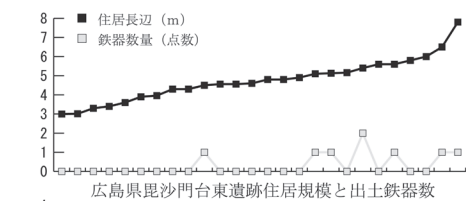
第8図 岡山県原尾島遺跡集計



第9図 岡山県津寺遺跡集計



第10図 山口県天王遺跡集計



第11図 広島県毘沙門台東遺跡集計

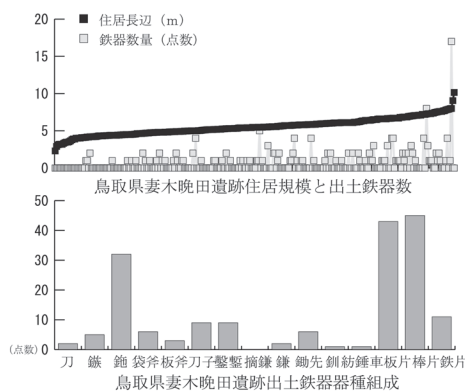
や広島市毘沙門台東遺跡^{注19)}などでは規模の大きい住居跡から鉄器が偏在して出土する傾向が窺える(第10・11図)。天王遺跡では規模の大きい住居跡に鉄器が集中するのに対して、毘沙門台東遺跡では先述した津寺遺跡のように平均を上回る規模の住居跡複数に鉄器がみられるといった傾向を示している。

山陽地域では大形鉄器が非常に少なく、鉄鏃や鉋などといった小形素材から加工できる成品しか普及しない。器種組成も貧弱である一方で、素材の供給量が九州北部に比べて著しく少なかったために鉄器自体の稀少性は増していたものと思える。

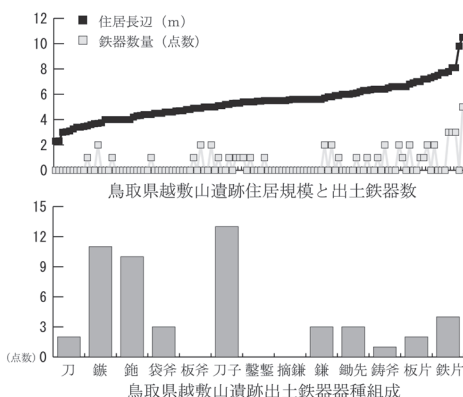
4. 山陰地域における鉄器保有の様相

山陰地域では近年、調査事例が蓄積されている鳥取県の集落を中心にみていく。まず、大規模な弥生集落として注目された鳥取県米子市・西伯郡大山町妻木晩田遺跡をみる(第12図)。(注20)

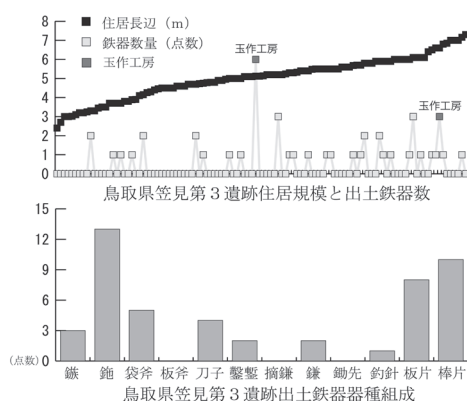
対象とした住居跡288基、住居跡の規模は長径あるいは長辺が2.30mから10.15m、平均5.52mであった。後期を通して住居跡平面形は円形から徐々に隅丸方形、方形へと変化していくようだが、大形住居跡では円形、隅丸五角形など多角形のものが混在し、小形住居跡は方形となる。妻木晩田4期から鉄器は出土するが、9期以降、住居跡の増加とともに鉄器も急増するようである。出土鉄器の総数は175点となる。鉄器・鉄片は小規模な住居跡からも出土するが、平均以上の住居跡規模になると、2点以上の鉄器・鉄片をもつ住居跡が増加し、長辺・長径が7.2m以上になると、さらにそれ以上の鉄器をもつものが目立つようになる。出土数および鉄器器種は異なるものの、熊本県狩尾遺跡群や岡山県原尾島遺跡群と同様に住居跡規模別出土点数において明らかな格差と序列を読み取ることができる。山陽地域よりも器種は多彩であるが、その総数は決して多くはない。鉈などが主要となるほかは農工具などといった他の器種の出土数はかなり少ない。むしろ板状あるいは棒



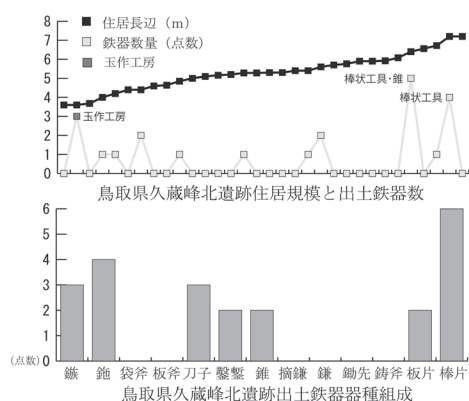
第12図 鳥取県妻木晩田遺跡集計



第13図 鳥取県越敷山遺跡集計



第14図 鳥取県笠見第3遺跡集計



第15図 鳥取県久蔵峰北遺跡集計

状の鉄片の出土数がかなり多くなっていることがわかる。このなかには玉作や木器製作に利用されるような、これまでに知られていなかった小形の加工具が含まれているものとみることができる。^(注21)

次に、鳥取県西伯郡会見町越敷山遺跡をみる^(注22)。越敷山遺跡も中期後葉から住居跡はみられるものの、後期中葉(越敷山Ⅳ期)から増加し始める。対象住居跡116基、住居跡の規模は長辺・長径が2.30mから10.51m、平均5.40mであった。妻木晩田遺跡同様に住居跡平面形が円形から隅丸方形、方形に変化していくが、大形住居跡では円形あるいは隅丸五角形・六角形が多くを占め、小形住居跡では方形となる。総数52点の鉄器は平均以上の規模の住居跡から出土する頻度が高くなる傾向があるようにみえる。

山陰地域では、玉材を加工して装身具を製作した住居跡(いわゆる「玉作工房」)が集落内に少なからず認められる。近年調査された鳥取県東伯郡琴浦町笠見第3遺跡^(注23)では碧玉や緑色凝灰岩、水晶などを素材とした玉作を行なった住居跡から玉作用に利用されたと思われる棒状の鉄製工具(棒状工具)や錐が出土した(第14図)。同町久蔵峰北遺跡^(注24)でも小形住居跡に玉作工房とされるものがある。大形住居跡には棒状工具や錐が出土しているものもあり、玉作が行なわれていた可能性が高い(第15図)。両集落では装身具といった貴重品の加工製作に小形鉄器が投入されるといった社会的環境にあったものとみられる。京都府北部、京丹後市の奈具岡遺跡でも、玉作を行なった住居跡から多くの棒状工具が出土したことか^(注25)ら、山陰地域では鉄器出土数の多寡に、住居跡規模とは異なる要因が入り込むようである。

5. 弥生時代後期における鉄器普及

以上から、集落内において、鉄器がどのように保有されていたのかをみてきた。今回の分析は、大形住居には村落内のエリート層が居住していることを前提としてみてきた。大

形住居の居住者の社会的地位が想定とは異なれば、今回の分析結果は的を射ないものとなるであろう。しかし、およそ30基以上の住居跡が調査された集落遺跡における鉄器の出土状況の集計からすれば、大形住居跡に多数の鉄器が保有されていた集落と、そうでない集落があることはまずまちがいないであろう。仔細にみれば、集落遺跡における鉄製品の出土数によっても、その保有の状況がやや異なるようであった。さらには地域ごとにほぼ同じような傾向をみせていることを示すことができた。以上の分析から、集落内の住居跡規模からみた出土鉄器の偏在状況について、現実的には判断の難しいものがみられるものの、概ね以下のような分類(鉄器保有類型)を行なうことができよう。

A 類；大形住居跡に鉄器が偏在する(首長層や村落内階層上位者などエリート層による鉄器の占有あるいは分配が想定される場合)。

A 1 類；平均的な規模以上の住居跡に鉄器出土の傾向がみられる。

A 2 類；ある程度の鉄器が出土し、大形住居跡に数点以上の鉄器の集中がみられる。小規模住居跡にも鉄器がみられる場合が多い。

A 3 類；集落全体で多量の鉄器^(注26)が出土する。とくに大形住居跡に多数の鉄器出土が認められるものの、小規模住居跡からも少数の鉄器が普遍的に出土する。

B 類；大形住居跡に鉄器が偏在しない(首長層や村落内有力者などエリート層による鉄器の占有が想定できない場合)。

B 1 類；住居跡規模に関係なく、わずかな鉄器の出土がみられる。

B 2 類；集落全体である程度の鉄器が住居跡規模に関係なく出土する。

B 3 類；集落全体でA 3 類同様、多量の鉄器が出土する。大形住居跡のみでなく、中小規模の住居跡からも普遍的に出土する。

C 類；住居跡規模とは別に、特定財の生産を行なう住居跡に鉄製工具等が伴う(貴重品などの加工製作に小形鉄器が利用されると想定できる場合)。

C 1 類；貴重品などの加工を行う住居跡にわずかな鉄製工具の共伴がみられる。

C 2 類；集落全体でもある程度の鉄器が出土する。貴重品の加工に使用された鉄製工具が住居跡から出土する。

C 3 類；集落全体でA 3 類同様、多量の鉄器が出土する。集落全体が貴重品の生産に従事していたと考えられ、専門化した工程を受け持つ特定の住居跡から多数の鉄製工具が出土する。

九州北部地域では、首長層の顕現と地縁的結合をもつ農業共同体の成立ののち、さらな

る可耕地開発のために独自に鉄刃農具を作り出すにいたったものとみることができる。一般的な集落における鉄器保有類型はB 2類が主体となる。九州北部地域では鉄刃農具が貴重財として贈与交換に供されていたわけではなく、首長層や村落内階層上位者の人々によって独占されていたわけでもなかった。おそらくそれらは九州北部中枢部内の各地の市場から供給され、拡散していった耐久消費財と認識できよう。

九州中部地域では、九州北部地域とは異なり、生産される鉄器器種が限られていたようである。水稻耕作への経済的依存度や水田可耕地開発への社会的欲求が低かったためか、あるいは素材となる大形鉄板の成形が難しかったためか、大形鉄刃農具（鉄鎌や鋤・鉄先）は非常に少ない。鉄器出土例が少ない場合には鉄器保有類型B 1類がみられるものの、他はA 2・3類が主体となる。大形住居跡に多量の鉄器・鉄片がみられる傾向があり、大規模集落において鉄器加工を行ない、周辺の小集落に鉄製品を供給したものと想定できる。市場による供給というよりは、首長層あるいは村落内上位階層による分配を想定する方がよからう。このため、大規模集落と小規模集落における鉄器普及率が異なりつつも、小地域的な形態差が顕著に認められるようになる。しかし、量産された鉄器の多くは消耗品として使用される鉄鋸などであった。副葬品としては利用されなかったことから貴重財としての生産や流通とは異なるようである。集落内の平均的な住居跡からも多数出土することから、一般構成員でも保有可能な消費財として認識されていたのであろう。

山陽地域では、弥生時代後期中葉ごろまでには瀬戸内各地の集落で鉄器が普及するが、その器種は鉄鋸と鉈を基本とし、大形鉄刃農具の保有はまれである。鉄器保有類型はA 1・2類が主体となり、A 3類は百間川原尾島遺跡のみである。鉄器・鉄片の供給量は九州中部地域と比較して著しく少ないが、鉄器の保有類型はA類が多く、共通点もみられる。村落内階層上位者によって分配された可能性があり、全体としてみれば市場によって交換された場合もあったのかもしれないが、その数量は限定されるといってよからう。鉄製刀剣はいまだに普及しておらず、山陰地域と比較すれば、地域首長でさえ特定威信財鉄器の入手は相対的にかなり困難な状況にあったものとみられる。

山陰地域では、各地の集落で鉄器が普及するが、その器種は山陽地域よりも多彩である。山陽地域と同様に鉄鋸と鉈を基本とするものの、不明鉄器や棒状あるいは鑿・錐状の小形鉄器などが多数出土する傾向がある。鉄器保有類型はA 1・2類が主体となるものの、C 1・2類が出現してくる。先述したように、玉作を行なった住居跡にそのような小さな鉄器・鉄片が出土することから、おそらくこれらは生産されていた貴石装身具など高級工芸品（貴重財）の生産に使用された加工具であった可能性が高いものとみられる。^(注27)京都府北部、丹後地域では奈具岡遺跡がC 3類の様相を示しているといえる。九州地域や山陽地域とは

異なり、高級工芸品の生産に鉄製工具が投入された状況を看取することができよう。

おわりに

今回の論考は2009年9月12・13日、兵庫県立考古博物館で行なわれた第58回埋蔵文化財研究集会「弥生時代後期の社会変化」において発表した内容を基礎として^(注28)いる。今後、さらなる住居跡出土鉄器の集計とともに、上記分類基準を検証し、再論してみたい。埋蔵文化財研究集会の発表にあたっては、魚津知克氏、多賀茂治氏にご配慮いただいた。また、菅榮太郎氏には有益なご助言をいただいた。記して感謝したい。

(のじま・ひさし＝広島大学大学院文学研究科准教授)

- 注1 春成秀爾「弥生時代と鉄器」(『国立歴史民俗博物館研究報告』133、国立歴史民俗博物館)2006、173-198頁。
野島 永『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』(平成17～19年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)2008、1-34頁。
- 注2 村上恭通「中九州における弥生時代鉄器の地域性」(『考古学雑誌』77(3))1992、319-344
野島 永「弥生時代鉄器の地域性－鉄鍬・鉋を中心として－」(『考古論集 潮見浩先生退官記念論文集』広島大学文学部考古学研究室)1993、433-454頁。
- 注3 Hirth, K.G., The Distributional Approach: A New Way to Identify Market Place Exchange in the Archaeological Record. *Current Anthropology* 39(4), 1998, 451-475.
なお、「社会的優劣のある住居」とは、多くの民族例が示しているように、住居規模による分類が最も妥当で現実的であると考ええる。
- 注4 野島 永「鉄器の生産と流通」(『弥生社会のハードウェア』弥生時代の考古学6、同成社)2009、43-52頁。
野島 永「日本における古代鉄文化」(『東アジアの古代鉄文化』雄山閣)2010、153-170頁。
- 注5 集計対象とした発掘調査事例については、多くの堅穴住居跡が調査されており、住居跡と埋蔵された遺物の遺存状況が比較的良好で、なるべく他の遺構や新たな堅穴住居跡によって破壊されてはいないような調査成果を選択した。
- 注6 秦 憲二編『以来尺遺跡』Ⅰ(一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集、福岡県教育委員会)1997。
- 注7 児玉真一『乙隈天道町遺跡、県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告』3(福岡県文化財調査報告書第86集、福岡県教育委員会)1989。
- 注8 片岡宏二編『三沢栗原遺跡』Ⅲ・Ⅳ(小郡市文化財調査報告書第23集、小郡市教育委員会)1985。
- 注9 片岡宏二編『三国の鼻遺跡』Ⅲ(みくに野第2土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告－8－、小郡市文化財調査報告書第43集、小郡市教育委員会)1988。

注10 堅穴住居跡の規模は円形住居の場合、長径にあたる掘形上場間の距離、隅丸方形・方形住居の場合、対辺あるいは長辺掘形上場間の距離を計測したが、多角形住居の場合、検出された範囲で最も長くなる対角の掘形間距離を計測した。また、集計母数を確保するため、堅穴住居跡自体が完存してはいないものの、調査者等による推定数値があれば、集計に加えた。また、最大掘削深が15cm以上であれば、埋土の堆積量と出土鉄器数との間にはとくに顕著な相関はみられなかった。建替え等によって、以前の住居跡掘形が破壊され、遺物の回収が見込めない住居跡や、ほぼ半分以下しか遺存しないと考えられる住居跡は集計の対象とはしなかった。よって、他の遺構によって攪乱された堅穴住居跡でも、平均的な掘削深が少なくとも10cm以上で、長辺あるいは長軸の規模が実測値あるいは推定値として把握でき、かつおよそ半分以上遺存していると想定できるものを集計した。また、床面出土遺物だけでなく、床面から遊離している鉄器資料についても、同時期と考えられるものについては当該住居に関する資料と仮定し、図に含めた。

第2図～第15図の上図縦軸は堅穴住居跡掘形上場の長辺(長径)距離(m)と、出土鉄器等の点数の両方を示している。上図横軸は各住居跡を規模順に配列した。また、下図縦軸は各種鉄器・鉄片・鉄滓の点数、横軸は鉄器器種を示した。不明品は器種別点数に含めてはいない。

注11 九州北部地域では鉄刀や鉄剣、あるいはガラス製装身具が堅穴住居跡から出土することは珍しくはないが、これらの遺物は平均的かそれ以上の規模の堅穴住居跡から出土する場合が多いことから、これらが鉄製農工具などとは異なる性格の財であったことを示しているともいえよう。また、このようなかなり多くの貴重財が集落跡から出土すること自体、これらの財の供給量がおびただしいものであったことを類推させる。

注12 木崎康弘他『狩尾遺跡群－激甚災害にともなう埋蔵文化財の調査－』(熊本県文化財調査報告第131集、熊本県教育委員会)1993。

注13 注2村上文献。

狩尾遺跡と同様に阿蘇山麓周辺に所在する菊池市西弥護免遺跡出土鉄器の放射化分析が行われ、西弥護免遺跡出土鉄器はすべて低As、高SbのBグループに属し、未だ同様のグループに属する鉱石が知られていないものであった。バナジウム含有量からも、独自の鉄生産の可能性も残るところである。

平井昭司・吉岡康暢・藤尾慎一郎・田口 勇他『国立歴史民俗博物館研究報告』第59集(日本・韓国の鉄生産技術〈調査編2〉、国立歴史民俗博物館)1994。

注14 嶋田義仁「社会生活の根源的政治性と異次元交換」(『異次元交換の政治人類学』勁草書房)1993、296-337頁。

注15 坂本嘉弘編『高松遺跡』(犬飼町教育委員会)1988。

注16 光吉勝彦・葛原克人・伊藤 晃他『百間川・原尾島遺跡』1(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会)1980。

正岡睦夫他『百間川・原尾島遺跡』2(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会)1984。

宇垣匡雅編『百間川原尾島遺跡』3(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88、建設省岡山河川工

- 事事務所・岡山県教育委員会)1994。
- 平井 勝・岡本寛久他『百間川原尾島遺跡』 4 (旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査10、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会)1995。
- 柳瀬昭彦・高田恭一郎他『百間川原尾島遺跡』 5 (旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査11、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会)1996。
- 小嶋善邦・宇垣匡雅他『百間川原尾島遺跡』 6 (旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査15、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告179、国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会)2004。
- 下澤公明・高田恭一郎他『百間川原尾島遺跡』 7 (旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査17、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215、国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会)2008。
- 注17 中野雅美編『津寺遺跡』 2 (山陽自動車道建設に伴う発掘調査10、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会)1995。
- 亀山行雄編『津寺遺跡』 3 (山陽自動車道建設に伴う発掘調査12、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会)1996。
- 亀山行雄編『津寺遺跡』 4 (山陽自動車道建設に伴う発掘調査14、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116、日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会)1996。
- 高畑知功・中野雅美編『津寺遺跡』 5 (山陽自動車道建設に伴う発掘調査15、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127、日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会)1998。
- 高畑知功編『津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告142、岡山県教育委員会)1999。
- 注18 谷口哲一『天王遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第108集、日本道路公団徳山工事事務所・山口県教育委員会)1988。
- 注19 大崎尚吾・吉原輝明『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第48集、広島市教育委員会)1990。
- 注20 松本哲・門脇豊文他『妻木晩田遺跡発掘調査報告』 I・II・III・IV (大山町埋蔵文化財調査報告書第17集、大山町教育委員会)2000。
- 注21 野島 永・河野一隆「玉と鉄－弥生時代玉作り技術と交易－」(『古代文化』53(4))2001、37-52頁。
村上恭通「弥生時代鉄製工具における新器種とその分布」(『考古論集 川越哲志先生退官記念論文集』 広島大学文学研究科考古学研究室)2005、321-328頁。
- 注22 岡田龍平・岡田好弘他『越敷山遺跡群』(グリーンパーク大山ゴルフ倶楽部建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、会見町教育委員会・岸本町教育委員会)1994。
- 注23 牧本哲雄・小谷郁夫・小山浩和他『笠見第3遺跡』(一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、鳥取県教育文化財団調査報告書86、鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所)2004。

- 湯村 功・高尾浩司・大川康広他『笠見第3遺跡』Ⅱ(鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書14、鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所)2007。
- 注24 小山浩和・野口良也・長尾かおり他編『久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡・岩本遺跡』(一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書89、(財)鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所)2004
- 注25 注21野島・河野文献。
- 河野一隆・野島 永「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡平成8年度発掘調査概要奈具岡遺跡(第7・8次)」(『京都府遺跡調査概報』第76冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1997、30-82頁。
- 注26 集計対象住居跡から出土した鉄器・鉄片数を対象住居跡数で除した値が1(100%)以上になる場合を「多量」と表現した。鉄器・鉄片数に鉄滓は含んではいない。
- 注27 鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡では、弥生時代後期後半頃に属する鉄鑿や小型鉄斧、穿孔具などの小型鉄製工具が出土している。装飾高杯などを加工する際に利用されたものと考えられている(注21村上文献)。
- 注28 野島 永「弥生時代後期における鉄器の生産と流通」(『弥生時代後期の社会変化発表要旨・資料集』埋蔵文化財研究会、第58回埋蔵文化財研究集会実行委員会)2009、79-94頁。